

松 山 大 学 論 集  
第 34 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 2 2 年 12 月 発 行

人間から樹木へ受け継がれる生命  
—— ラフカディオ・ハーンが『怪談』で再話した  
松山ゆかりの桜の物語 ——

矢 次 綾

# 人間から樹木へ受け継がれる生命

—— ラフカディオ・ハーンが『怪談』で再話した  
松山ゆかりの桜の物語 ——

矢 次 綾

## I 序

ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn, aka 小泉八雲, 1850-1904) の『怪談』 (*Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*, 1904) には、樹木と人間の超自然的な関わりに焦点を当てた物語が3編——「青柳の物語」 (“The Story of Aoyagi”), 「乳母桜」 (“Ubazakura”), 「十六桜」 (“Jiu-roku-zakura”)——, 収められている<sup>1)</sup>。桜に関する2編はどちらも松山を舞台にしているが、松山という土地に対してハーンが特別な思いを抱いていたわけではなさそうである。この2編は、1901 (明治34) 年の『文藝倶楽部』 (博文館) 第七卷第三号と第八号の中で、愛媛の淡水生 (生没年不詳) という人物が「諸国奇談」として紹介した物語を、ハーンが再話したものである<sup>2)</sup>。妻の小泉節子 (1868-1932) が暗唱するなり内容を伝えるなりした物語の中で<sup>3)</sup>、ハーンの関心を惹き、再話の対象とした桜の物語2編が、偶然にも松山ゆかりだったに過ぎないだろう<sup>4)</sup>。なお、淡水生が「十六日櫻」の最後に「諸君も道後温泉に入浴の際には一度杖を曳き賜え何でも道後よりは二十町に不足そうな」 (219) と書き添えていることから、観光案内を兼ねた軽い読み物として『文藝倶楽部』に掲載されたようである。

もっとも、かねてから俳句に興味を持っていたハーンが、正岡子規 (1867-1902) ゆかりの土地として松山を認識していた可能性を否定することはできないだろう。ハーンが子規を知っていた証拠として、子規が1896 (明治29) 年

に、松山の龍穩寺の桜を詠んだ「うそのやうな十六日櫻咲きにけり」(『瀨祭書屋俳句帖抄』, 1902 [明治35]年)を、「十六桜」のエピグラフ(“*Uso no yona, / Jiu-roku-zakura / Saki ni ker!*”)にしていることを挙げるができる<sup>5)</sup>。ハーンが俳句を好んでいた証拠として、例えば、「思い出の記」における節子の記述がある<sup>6)</sup>。

発句を好みまして、これも沢山覚えていました。これにも少し節をつけて廊下などを歩きながら、歌うように申しました。自分でも作って芭蕉などと冗談いいながら、私に聞かせました。(35)

続けて節子は「どなたかが送って下さいましたか『ホトトギス』を毎号頂いておりました」(36)と記している。『ホトトギス』は1897(明治30)年に子規の友人、柳原極堂(1867-1957)が松山で創刊した雑誌であり、『ホトトギス』という雑誌名は、啼いて咯血するホトトギスを意味する子規という俳号に由来する。すなわち、ハーンは子規についてある程度の情報を持っていたはずである。子規がその句を詠んだ時点で、故郷松山から遠く離れた東京根岸の子規庵で「歩行自由ならず多くは病床」(『正岡子規集』301)にあったことをハーンが知らなくても、子規が松山の十六日桜に思いを馳せながらこの句を詠んだらしきことを、察知していた可能性があるだろう<sup>7)</sup>。

ハーンは、桜が日本人にとって特別な花だと認識していたようである。その証拠の一つとして、ハーンは『見知らぬ日本の面影』(*Glimpse of Unfamiliar Japan*, 1894)の「日本の庭にて」(“*In a Japanese Garden*”)第5節において、同時代を代表するジャパノロジスト、チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)の言葉や、本居宣長(1730-1801)の歌を紹介するだけでなく、「花は桜木、人は武士(As the cheery flower is first among flowers, so should the warrior be first among men)」という「古い諺(old proverb)」を引用しながら、桜のたたずまいと日本人の倫理観を関連づけている。そうした上でハーンは、

桜の「汚れを知らない」姿が「高い礼節と、真の武士であれば持っているはずのきめ細かな情感と清廉潔白な生き方の象徴と見なされていた」と記しているのである（289-90）。

ただし、ハーンが心に留めていた時間について言えば、『怪談』における樹木に関する物語の中では、桜よりも青柳に関する物語の方が長いようである。そう考えられる理由は、ハーンが「青柳の物語」を再話する約10年前、前掲の「日本の庭にて」第6節の中に、よく似た物語——武士の妻になった柳の精霊が、自分の生命の依存する木を切り倒されたために、武士との夫婦生活をもはや続けることができなくなる伝説——を書き込んでいるからである（359-60）。この伝説と「青柳の物語」、さらに「青柳の物語」の原拠である辻堂兆風（生没年不詳）の『玉すだれ』第三「柳情霊妖」（1704〔元禄17〕年）を比較すると<sup>8)</sup>「日本の庭にて」に書き込まれた伝説においてのみ、木が伐採される理由が明示され、木が伐採された後の展開や、木が生えていた場所などが異なる。要するに、この伝説と「青柳の物語」とでは原拠が異なると考えられるが、大筋を同じくする柳の伝説が複数存在していたのであろう。いずれにしても、樹木の精霊と人間との異類婚姻譚にハーンが強い関心を寄せていたことを読み取ることができる<sup>9)</sup>。

ハーンは、柳の精霊に関する伝説を「日本の庭にて」に書き込んだ理由を、この物語が「古代ギリシャの木の精ドリユアス（Dryads）を思い出させる、なかなか哀れ深い伝説」だからだと記している（359）。ハーンはこの伝説に興味を持ち続けていたようで、その数年後の1896年から1903年まで英文学講師を務めていた東京帝国大学での講義「西洋の詩歌における樹の精について」（“On Tree Spirits in Western Poetry”）においても、ドリユアスについて論じている。その講義の中でハーンは、樹の精が主に女性であり、超自然的能力が備わっていたと前置きした後に、「彼女たちの生命は樹の生命に依存していたから、その樹木が枯れてしまうと、樹の精も死んでしまう」運命にあったため、「彼女たちの樹木をたいそう心配し、自分たちの樹木が丁重に扱われているか、ある

いは傷つけられたりしていないか、それによっては、人間に報いたり、人間を罰した」のだと説明している (*Interpretations of Literature* 229)。

「日本の庭にて」に書き込んだ伝説と「青柳の物語」、各々のヒロインは、「人間に報いたり、人間を罰した」りしていなくても、ハーンが論じたドリュアスの特徴を備えている。人間の女として武士の前に現れたヒロインは、正体を明かすことなくその妻になり、幸福な結婚生活を送るが、自分の生命が依存する木が伐採されることにより、結婚生活に突然の終止符が打たれる。伐採後の展開の違いは次の通りである。「日本の庭にて」に書き込まれた伝説において、精霊の生命は倒木の中に保存され、柳の小枝を拾った幼い息子の「おいで (Come)」という呼びかけに倒木が応じ、息子について行く (360)。一方の「青柳の物語」において、木が伐採されつつあることを察知したヒロインは、苦痛の叫び声をあげると真っ青になり、念仏を唱えてくれと夫、友忠に請う。次の引用は、妻の様子に困惑し、しばらく休めば治まるのではないかと、言うのがやっとの友忠の前で繰り広げられた光景である。

“No, no !” she responded — “I am dying ! — I do not imagine it ; — I know ! . . . And it were needless now, my dear husband, to hide the truth from you any longer : — I am not a human being. The soul of a tree is my soul ; — the heart of a tree is my heart ; — the sap of the willow is my life. And some one, at this cruel moment, is cutting down my tree ; — that is why I must die ! . . . Even to weep were now beyond my strength ! — quickly, quickly repeat the *Nembutsu* for me . . . quickly ! . . . Ah !” . . .

With another cry of pain she turned aside her beautiful head, and tried to hide her face behind her sleeve. But almost in the same moment her whole form appeared to collapse in the strangest way, and to sink down, down, down — level with the floor. Tomotada had sprung to support her ; — but there was nothing to support ! There lay on the matting only the empty robes of the fair

creature and the ornaments that she had worn in her hair : the body had ceased to exist ... (150-51)

妻を失った友忠は仏門に帰依し、妻と出会った越前の山中に赴く。そこで、妻である精霊とその両親、合わせて3本分の柳の切り株を発見すると、3人のために墓碑を建て何度も供養をしたと記されて、物語は締めくくられている。牧野陽子が述べているように、「青柳の物語」は「しっとりとした情緒と優しさ」に包まれており、ハーンの他の怪奇譚に見られるような「恐怖、裏切り、疑い、恨みなどかけらもなく、あるのは愛と善意、信頼と誠意」だと確かに考えられる。また、友忠が出家した理由は、牧野が述べているように、例えば「日本海に沿って」(“By the Japanese Sea,” *Glimpses*) 第10節における「出雲の伝説」の中で、持田の浦の農夫が嬰兒殺害を繰り返した「罪業の深さを悔いて」出家したのは事情が異なる(431-32)。しかしながら、念仏を唱えるよう、自分に懇願しながら消え去ってしまった妻、青柳の願いに応じてやれなかったという後悔の念に友忠が苛まれ、それが仏門に帰依した理由として大きいのではないだろうか。しかも、青柳は死体を残しさえしなかったわけであり、友忠は妻を失った悲しみというよりも、喪失感に包まれて呆然としたはずである。したがって、友忠が妻の木の痕跡を探し出し、墓碑を建てて供養した理由として、妻が確かに存在していたことを確認し供養することによって、友忠自身が妻の死を受け容れようとしたことが大きいと考えられるのである。「青柳の物語」結末部に漂う何とも言えない寂寥感<sup>ち</sup>は、原拠「柳情霊妖」の中で「天<sup>てん</sup>にこがれ地にふしてかなしめども。さりし面影<sup>おもかげ</sup>は夢<sup>ゆめ</sup>にたにみえず」と描写された、「<sup>こ</sup>袖のミにして形体<sup>かたち</sup>」が無い妻を前にした友忠の心情描写(395)にも読み取ることができる。

ハーンが『怪談』の中で「青柳の物語」を再話した背景として、東京在住時の彼にとって聖域だった瘤寺の杉木立が伐採された件があると考えられる<sup>10)</sup>。それは、妻の節子が「子供等も、パパさんが見えないと『瘤寺』というほどで

ございました」(16)と記すほど、ハーンのお気に入りの場所だった。伐採の経緯について、ハーンの伝記作家の一人、エリザベス・スティーヴンソンは次のように記している。

Toward the end of 1901 the sound of axes biting into live wood destroyed Hearn's private refuge. One day a dead limb of one of the giant cedars of Kobudera fell with a crash and damaged one of the tombs under the tree. The parishioners voted to cut down the tree and sell the wood. Hearn offered to buy the tree or the ground on which it stood. He was refused. Not one tree, but three, were felled. (305-06)

避難所 (private refuge) を奪われたハーンは「牛込に耐えられなくなり、隠岐の島に引っ越しましょうと提案」し、「もっと現実的になると、東京内で別に住む場所を見つける心づもりをした」(306)とスティーヴンソンは書き添えている。杉木立が伐採される前年に、東京帝国大学文科大学長で、ハーンの後ろ盾だった外山正一(1848-1900)が、そのさらに3年前には、松江尋常中学校の教頭で、ハーンが松江を去った後も交流が続いていた西田千太郎(1862-97)が亡くなっている(Stevenson 305)<sup>1)</sup> 2人の友人を失い、ハーンはただでさえ意気消沈していたために、避難所を喪失した寂しさを殊更強く感じたのであろう。それが「青柳の物語」の友忠の喪失感や、その周囲に漂う寂寥感と関連する証拠は、残された切り株の数である。ハーンも友忠も大切なものを失い、3本の切り株だけが残された。瘤寺の杉木立の件は、節子も「思い出の記」に記しており(17)、スティーヴンソンの記述とは伐採の経緯がやや異なるものの、切り株の数は一致している。

「青柳の物語」の結末に漂う喪失感や寂寥感は、「乳母桜」や「十六桜」からは感じられない。桜を巡るこの2編は「青柳の物語」よりも格段に分量が少ないため、そういった書き込みが十分になされていないと考えることは可能だが、

その点を考慮しても、この2編では、主要人物が死亡するにも関わらず、そういった感覚は著しく希薄である。その理由は、死者の願いが叶えられ、しかも、その生命が別の形態で続いているためであろう。この2編のような転生譚ではないが、類似した例として、ハーンが松江で収集した物語を「神々の国の首都」(“The Chief City of the Province of the Gods,” *Glimpses*) 第18節で再話した、中原町の大雄寺の墓地に伝わる話がある。死の直後、子を宿したまま埋葬され、墓の中で出産したと思われる母親が霊となり、乳幼児の我が子を水飴で滋養し続ける物語である。ハーンは「愛は死よりも強し (love being stronger than death)」(133) という、彼自身の見解で物語を締めくくることによって、死を超えて生き続ける何かがあるはずだという信念を表現している。

## Ⅱ 「乳母桜」

概略を先に述べるなら、ハーンの「乳母桜」は、乳母のお袖が、自ら不動明王 (Fudō-Sama) に祈願し、重病を患った養い子、お露の身代わりとして死亡する物語である。桜の植樹は不動明王との約束、すなわち、自分の願いが聞き入れられた場合のお袖からの不動明王への御礼だった。語り手は、物語の最後に、植樹後254年間に渡り、お袖の命日にあたる旧暦2月16日に咲き続けた「桜は薄紅と白で、あたかも乳に濡れた女の乳首のようだった (its flowers, pink and white, were like the nipples of a woman's breasts, bedewed with milk)」(55) と記すことによって、乳母のお袖が桜の木に転生したことを示唆している。生命を助けられたとき、既にお露は15歳であり(54)、お袖は授乳という乳母本来の役割をととの昔に終えているが、それでも養い子の生命を育み続けようとするお袖の姿は、前節の最後に言及した、松江の大雄寺に伝わる話の母親と重なり合う。後者が、母乳代わりの水飴では滋養しきれなくなった後も我が子が健やかに育つよう、手はずを整えるべく、飴屋を自分の墓へと誘い、我が子を託しているからである。異なるのは、「乳母桜」のお袖が桜の木という新たな生命を得て生き続ける点である。

「乳母桜」は淡水生の「姥桜」を大方なぞって再話されているが、ハーンの創作として特徴的なのは、お袖が転生した桜の描写であろう。「姥桜」で「<sup>あたか</sup>恰も乳の形」を成していると描写されている桜に、ハーンは、前の段落で引用したように、授乳のイメージを重ね、さらに、印象派の絵画に見られるような、色鮮やかで光を感じさせる描写を施している。そうした理由の一つとして、同時代のヨーロッパにおける印象派の運動を知っていたハーンが、その特徴を語りの技法として取り入れ、読者として想定した西洋人にとって魅力的な像を提供しようとした可能性が挙げられる。もう一つの理由として、授乳という乳母本来の仕事を終えても、養い子のことを第一に考え続けるお袖の利他性と、転生の神秘性を効果的に描こうとするハーンの意図があると考えられる。その前提として、ハーンはお袖を、淡水生の「姥桜」の場合よりも、控えめで口数が少ない人物として造形している。すなわち、「姥桜」のお袖は、お露の両親である名主夫婦に、自分が身代わりとして死につつあることを告げ、桜を植樹するよう請う際、その桜を「<sup>わらは おほしめ ごちようあいください くさば かげ うれ</sup>妾と思召し御寵愛被下らば草葉の影から嬉しく<sup>じょうぶつつかまつ</sup>成佛仕らん」(233)と付け加える。それに対し「乳母桜」のお袖は、「自分がお露様のために喜んで死ぬことを覚えておいてくださいませ (remember that I was happy to die for O-Tsuyu's sake)」(55)と言いつつ、自ら望んでお露の身代わりになり、死んでいく自分への気遣いは無用だという意味を伝えるのみであり、利他的な姿勢を貫いている。後者は、前者が匂わせている自分と桜の関係性について触れることもしていない。したがって、読者がその関係性について知るのには、お袖の命日に咲く桜が「薄紅と白で、あたかも乳に濡れた女の乳首のようだった」という描写を目にするときである。それと同時に、読者は、授乳という行為に象徴される、乳母から養い子への献身について思いを馳せることになる。

「乳母桜」と「姥桜」のどちらにおいても、桜の木は松山の西法寺に植えられたと叙述されているが、『愛媛県の歴史散歩』の中で、「小泉八雲の『怪談』にも紹介された姥桜の老樹が枝をはり、今なお樹勢は盛んである」(111)と記

述されているのは、大宝寺（松山市南江戸5-10-1）の桜である。松山には西法寺（下伊台町969）も存在するが、淡水生が物語の舞台とし（232）、ハーンもそれに倣っている（51）「伊予国温泉郡朝美村」は、1889（明治22）年の町村制施行により、旧温泉郡衣山村、沢村、辻村、味酒村の一部と南江戸村が合併して発足している（『松山市史』43）。この点を考慮すれば、「乳母桜」及び「姥櫻」に記された桜は、南江戸に現在もある大宝寺の桜だと考えて然るべきであろう。『愛媛県の歴史散歩』の同ページには、大宝寺の「寺伝」として次のように記されている。

当寺の創建者と伝えられる角之木長者の娘り姫が重い病気にかかり、乳母が自分の命と引換えに姫の命を助けて欲しいと本尊に祈願した。姫はまもなく全快したが、乳母は急病で死んでしまった。その乳母の遺言で植えられたのがこの桜である。

葛城三千子も著書の中で、『怪談』の「乳母桜」として大宝寺の桜について記し、「樹齢300年のエドヒガンザクラ」（53）という情報を付け加えている。エドヒガンザクラはお彼岸に咲くことから、そのように呼ばれるわけだが、お袖の命日である旧暦の2月16日は現在で言えば春分の日頃であり、お彼岸にあたる。開花の時期が「姥櫻」や「乳母桜」の記述と一致している。なお、西法寺には薄墨桜と呼ばれる桜があるが、西法寺のウェブサイト（<https://saiho-ji.or.jp/bloom/>、最終アクセス日は2022年8月8日）によると、見頃は4月10日頃である。大宝寺の「寺伝」に話を戻すなら、人物の名前などが異なる類話が複数あり、淡水生はそのうちの一つを『文藝倶楽部』で紹介したのであろう<sup>12)</sup>

### Ⅲ 「十六桜」

十六日桜があったと淡水生が記している「温泉郡山越村龍穩寺」の桜は、『愛媛県の歴史散歩』によると、「寺とともに戦災で焼失」している。前掲書には、

「八雲が孝子桜として紹介した十六日桜」は同じく御幸の天徳寺で見ることができるといふ記述もあるのだが(115)、淡水生やハーンが語っているのは、孝子すなわち親孝行な子供が、年老いた親に桜の花を見せる物語ではない。寺町であるこの界隈には桜の名刹として知られる寺が他にも複数あり、孝子桜として知られる別の十六日桜との混乱が生じているのであろう。実際、この地域には、1906(明治39)年1月に建碑された「孝子櫻の碑文」がある<sup>13)</sup>。正岡子規が1892(明治25)年春に、十六日桜と関連して「孝行は筈よりも櫻かな」と詠んでいることにも(『子規全集』60)<sup>14)</sup>十六日桜と親孝行が関連づけられる傾向が表れている。

淡水生の「十六日櫻」やハーンの「十六桜」は、一言で言えば、特定の桜の木が、老人の強い愛着と願望によって、本来の桜の季節に先立つ旧暦の1月16日に開花する物語である。淡水生は、舒明天皇(593-61)が「道後温泉に行幸遊ばされしときもこの櫻を觀覽あらせ給ひし」(219)と伝えられる桜の由来として、「齡已に八旬に餘り」たる「花を愛する翁」が「又花咲く春に逢ふこともあるらんか」と独り言を言ったとき、桜の木が「二三の蕾」を綻ばせたと叙述する。牧野の言葉を借りるなら、「人間と桜の木の心が通じ合って花を咲かせた」(240)わけである。一方、ハーンは、十六日桜として知られる桜の生命(life)は、その木が最初から持っていたものではなく、「木の中に存するある男の霊(the ghost of a man in that tree)」によって生かされていると前置きし、その男の魂がなぜその木の中に存するに至ったか、その経緯を語る物語に変更している。物語の結びで桜の木へのお袖の転生を示唆するにとどめていた「乳母桜」とは異なり、「十六桜」でハーンは転生物語であることを明示している。それに加えて、ハーンは「人は神の恩恵により、他人や別の生き物へ、樹木に対してでさえ、自分の命を与えることができると信じられていた」(157)と述べ、背景に、日本のアニミズム的な思想があることについても明示している。

「十六日櫻」だけではなく、孝子桜の物語とも異なるハーンの「十六桜」の

特徴は、本来は開花の時期ではない旧暦1月16日に花を見たいと、老人が望んだわけではないことであろう。すなわち、「十六桜」において桜の木はいったん枯れており、老人は、その木が然るべき時期に花を咲かせるべく、再生することを望んだのである。1月16日に開花したのは、老人がその日に自分の魂を木に転移させたからに他ならない。それでは、なぜ老人は桜の木を再生させようとしたのだろうか。それは、老人にとって、それが特別な木であり、ただ花を愛でるためのものではなかったからである。

He had played under that tree when he was a child; and his parents and grandparents and ancestors had hung to its blossoming branches, season after season for more than a hundred years, bright strips of colored paper inscribed with poems of praise. He himself became very old, — outliving all his children; and there was nothing in the world left for him to love except that tree. (156)

老人の家の桜樹は、彼が幸福な子供時代に回帰しながら、何世代も続く家族について思いを馳せる手掛かりであり、自分よりも先に亡くなってしまった子供たちの身代わりとして愛情を注ぐ対象だったのである。そのように設定することにより、ハーンは老人が自分の生命を与えることによって、桜の木を再生させるだけでなく、百年以上前の先祖の代にまでさかのぼる家族の思いや、老人自身の子供たちへの愛情に、永遠性を与えようとしたことを描き出そうとしている。

「青柳の物語」の中で、伐採後の柳の切り株は友忠にとって弔いの対象だった。既述したように、友忠は弔うことを通して、死体を残しさえしなかった妻の死を受け容れようと努め、妻の最期の願いを叶えてやれなかったという自責の念を癒そうとしたと解釈することができる。死に際の際の青柳は「前世から続くご縁 (some Karma-relation) により、私たちは何度生まれ変わっても一緒にな

ることができるでしょう」(149)と友忠に告げているが、それは生と死を繰り返す輪廻という循環の中での再会であり、再会するためには、現世における死を受け容れる必要がある。一方、「十六桜」の老人が切望したのは、桜の木の生命を続かせることであり、それに伴い、自分や自分の家族の思いを永続させ、死滅させないことである。要するに、老人は輪廻を超越した望みを抱き、それを叶える手段として、ハーンは、武士である老人に切腹を思いつかせた。このような願いを叶える手段には、強いインパクトと、桜の「汚れを知らない (spotless)」(*Glimpses* 290) 姿が醸し出す雰囲気との調和が必要だとハーンは考えたのであろう。既述したように、ハーンは桜のたたずまいと日本人の倫理観を関連づけており、この点も、ハーンが老人に切腹を思いつかせた要因であろう。牧野によれば、19世紀後半において、切腹という行為は世界に知られており、しかも、ハーンが「十六桜」を再話する数年前に、新渡戸稲造(1862-1933)の『武士道』(*Bushido, the Soul of Japan*, 1899)が出版され、「切腹が日本の武士の高潔な精神、忠節、勇気、正義感といった侍の倫理を象徴する儀礼的な行為であるというイメージを世界に定着」させるのに一役買っていた(223-24)。さらに、切腹するために老人が木の下に敷いた布の白、言及されていないがその上に飛び散ったはずの血の赤、血が飛び散ると同時に開花した桜の薄紅色(*Kwaidan* 157)という、「乳母桜」における光を感じさせる色彩よりも、コントラストの強い色彩は、老人の思いの強さと、起こした奇蹟の大きさを読者に印象づけるために、重要な役割を果たしていると言えよう。

#### IV 結び——永遠性の獲得

「十六桜」の老人が桜の開花と同時に獲得した永遠性を、「乳母桜」のお袖も獲得しているのではないだろうか。桜の木が、乳母を思わせる花をつけたのは254年間に限定されているが(55)、お袖は桜の木に転生して、お露よりも長生きすることにより、乳母として養い子の人生を最後まで見届け、さらに、お露の代わりに、彼女の何代にも渡る子孫の様子を見守り続けたと考えられるか

らである。換言すれば、「十六桜」の中で老人が再生させた桜の木と同様に、お袖の桜は、お露やその子孫が毎年花を愛でながら、お袖の献身の物語だけではなく、自分たち自身の幸福だった子供時代を想起し、生命が代々受け継がれていることに思いを馳せる手掛かりになったと考えられるからである。このように、主要人物が人としての死を迎えても、樹木に転生して永遠性を獲得することが、ハーンによって再話された、松山ゆかりの2編の桜の物語の特徴であり、死を超越して続く何かがあるはずだというハーンの思いの現れだと考えられる。

### 注

- 1) 「青柳の物語」, 「乳母桜」, 「十六桜」について日本語で言及もしくは引用する場合、タイトルも含め、漢字表記は、引用文献に挙げている、平川祐弘訳の『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』に倣っている。
- 2) 「乳母桜」及び「十六桜」の原拠は、注1に挙げた『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』における「原拠」(371-72, 397)及び、布村弘による前掲書の「解説」(335, 340-41)を基にしている。ただし、引用する場合は『文藝倶楽部』に依拠しているが、旧字体ではなく新字体を用いている場合や、ふりがなを付けていない場合がある。『文藝倶楽部』は、1895年1月から1933年1月にかけて、博文館が出版した文芸雑誌である。
- 3) 西成彦の言葉を借りるなら、『怪談』は、節子が暗誦した物語を「『へるんさんことば』を用いて説明させた上で、それをハーンが英語に直すという晩年の再話技法」(43)によって生み出されている。実際、節子自身が「思い出の記」の中で、次のように述べている。

私が昔話をヘルンにいたします時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになってまいりました。(22)

- 4) 「十六桜」の場合、執筆の直接的なきっかけは節子による暗誦もしくは内容の説明だったとしても、アンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-75)の「柳の木の下」に、神戸在住時(1794-96)のハーンが感銘を受けており、「十六桜」に創作の手を加える過程

- で多大な影響を与えた可能性がある」と牧野陽子が論じている (228-30)。牧野は、ハーンが「十六桜」だけではなく「青柳の物語」を再話する場合も、「古代より様々に語られてきた樹木への再生譚を念頭においていたもの」と解釈し、その証拠として「古今東西の植物の神話伝説を収集研究した書物」が富山大学中央図書館内ヘルン文庫に所蔵されていることを挙げている (226)。この点に関連して、牧野が注の中で言及しているように (357; n. 24)、伊藤亮輔が「怪談『十六ざくら』とアイルランド伝説」の中で、アイルランド伝説「悲劇のディアドラ」(“Deirdre of the Sorrows”)の「十六桜」に対する影響について分析している。伊藤が「十六桜」と「悲劇のディアドラ」の共通点として特に留意しているのは、「主人公が共に自殺を遂げ、死後その魂が枯死した桜樹、イチイの杭へと各々樹木に移り思いを遂げる点」(116)である。なお、ハーンが樹木に「霊性」を見出すようになった時期として、平川祐弘は、37歳のハーンがフランス領西インド諸島に滞在していた1887年を挙げ、その証拠としてスケッチ「ラ・ギアブレス」(“La Guaiablesse,” *Two Years in the French West Indies*, 1890)を挙げている(『オリエンタルな夢』215-16)。
- 5) ハーンのローマ字表記について、平川祐弘が「注：十六桜」の中で、子規は「いざよいざくら」と読ませたかったはずだが、「ハーンは五七五の音に合わせ、かつ日本語の数の数え方だけは知っているような西洋人読者のことも考えて Jiu-Roku-Zakura にしたのではあるまいか」(337)と指摘している。
- 6) 西川盛雄は俳句についてハーンが述べた随筆の一つとして、「小さな詩」(“Bits of Poetry,” *In Ghostly Japan*, 1899)を挙げ、その一部「日本の国では詩歌は空気のように偏在している。国民の誰もが詩歌に心を寄せている」を平川呈一訳で引用している(6)。牧野陽子は、ハーンが「日本人がどのような感性で蛙や蟬や蜻蛉や螢などの生き物を捕えているかを考察しつつ、沢山の俳句作品を有名無名に関わらず紹介」した例として、「蛙」(“Frogs,” *Exotics and Retrospectives*, 1898)などの随筆を挙げている。さらに牧野は、ハーンの俳句収集と調査を手伝った人物として、「松江中学でもっともハーンに好かれた生徒の一人で、後に東京大学英文科でもハーンの教えを受けた」大谷正信(1875-1933, aka 大谷繞石)について述べている(239-40)。大谷は英文学者であっただけではなく、俳人でもあり、平川祐弘は、「大谷正信が俳句の師である子規の[十六日桜の]句をハーンに教えているのであろう」(「注：十六桜」337)と推測している。
- 7) 子規の作であることを明記せずに、ハーンが十六日桜の句をエピグラフにした背景について、牧野は、淡水生の「十六日櫻」が伝える「人間と桜の木の心が通じ合って花を咲かせた」寒桜の「花を愛で、歌を言祝ぐという古代の感性」を子規の句に見出し、その感性が「今なお生きている、その伝統が保たれている」ことにハーンが心惹かれたためではないかと推測している。その句を冒頭に挙げた後に自分自身の再話を行った理由は、自分も、その伝統に連なろうとしたためではないかと分析している(240-41)。
- 8) 「青柳の物語」の原拠は、注1にも挙げた『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』の「原拠」(392-96)を基にしている。

- 9) 注4を参照。
- 10) 瘧寺は、「当時ハーンが住んでいた東京・市谷富久町の家の隣」にあった自証院円融寺のことであり(池田 204)、ハーンの葬儀は瘧寺で行われている(Stevenson 320)。
- 11) 梅本順子は、ハーンにとっての西田千太郎を「日本の心の友」と呼び、二人の関わりについて詳述している(75-95)。
- 12) 岩崎文雄は著書の中で「サクラが関係している伝説や昔話・民話など」の主なものを分類している(338-39)。その中で「姥桜」に関連するものとして「大阪の伝説」を挙げているが、同様の伝説が日本の他の地域にもある証拠の一つであり、細部が異なる類話が複数存在していても不思議はないだろう。
- 13) 注12で挙げた岩崎の著書にも、「十六日桜は、<sup>キチヘイザクラ</sup>吉平桜、初桜などとも呼ばれているが、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)によって『孝子桜』として世界に紹介されたサクラである」(339)と記されている。しかしながら、本稿に記しているように、ハーンの「十六桜」も、彼が依拠した淡水生の「十六日櫻」も孝子に関する物語ではない。岩崎が続けて叙述しているあらすじは、東俊造編『松山案内』に記されている碑文の内容(38-41)と同じである。桜の花を見たいと切望した老父に何とか花を見せてあげたいと奮闘する孝息子すなわち孝子、吉平の物語である。
- 14) この句は、子規の死後の1924(大正13)年に刊行された『寒山楽木』第一巻に掲載されている。

## 引用文献

- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Ed. Donald Ritchie. Tuttle, 2009.
- . *Interpretations of Literature*. Vol. 2. Ed. John Erskine. Kennikat, 1915.
- . *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Bernhard Tauchnitz, 1907.
- Stevenson, Elizabeth. *Lafcadio Hearn*. Macmillan, 1961.
- 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの日本』角川学芸出版, 2009年.
- 伊藤亮輔「怪談『十六ざくら』とアイルランド伝説」『へるん』第31号(1994年): pp. 115-17.
- 岩崎文雄『サクラの文化史』北隆館, 2018年.
- 梅本順子『浦島コンプレックス——ラフカディオ・ハーンの交友と文学』南雲堂, 2000年.
- 愛媛県高等学校教育研究会社会部会『新版愛媛県の歴史散歩』山川出版社, 2001年.
- 葛城三千子『そして一本桜——後世に残したい桜たち』右文書院, 2016年.
- 小泉節子「思い出の記」『小泉八雲——思い出の記・父八雲を憶う』恒文社, 1991. pp. 3-51.
- 小泉八雲『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』平川祐弘訳, 講談社, 2021年.
- 淡水生「姥櫻」『文藝倶楽部』第7巻第8号(明治34[1901]年6月): pp. 232-34.
- . 「十六日櫻」『文藝倶楽部』第7巻第3号(明治34[1901]年2月): pp. 218-19.

- 辻堂兆風「柳情霊妖」『玉すだれ』第三（元禄17〔1704〕年）；小泉八雲『怪談・奇談』平川祐弘編。講談社，2021年。pp.392-96.
- 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店，1998年。
- 西川盛雄「ラフカディオ・ハーンと正岡子規・夏目漱石の接点」『東光原：熊本大学附属図書館報』第35号（2003年1月）：pp.6-8.
- 布村弘「解説」『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』平川祐弘訳，講談社，2021年。pp.328-56.
- 東俊造『松山案内：附・道後高浜三津郡中』松山市勤業協会，1909年。（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/766523/39>，最終アクセス日は2022年8月8日）
- 平川祐弘『オリエンタルな夢——小泉八雲と霊の世界』筑摩書房，1996年。
- .「注：十六桜」『個人完訳小泉八雲コレクション——骨董・怪談』河出書房新社，2014年。pp.336-37.
- 牧野陽子『〈時〉をつなぐ言葉——ラフカディオ・ハーンの再話文学』新曜社，2011年。
- 正岡子規『子規全集』第一巻俳句一。正岡忠三郎他編。講談社，1975年。
- .『正岡子規集』久保田正文編。筑摩書房，1975年。
- 松山市史編集委員会『松山市史』第三巻近代。松山市役所，1995年。